

探検家リチャード・バートンが  
「文学者」になった話

奥 正敬

■はじめに

アフリカ大陸は19世紀の半ばになっても地理的な詳細が知られていませんでした。イギリス軍諜報員のリチャード・フランシス・バートン (Sir Richard Francis Burton, 1821-1890) は、この大陸を調査して業績をあげます。その後、彼は専門分野が異なる「アラビアンナイト」の英語訳に挑みますが、そこに示された感性は大きな波紋を呼びました。ここでの話は、バートンの文筆家としての一面を確認してみたいと思います。

■多くの語学に通じた文武兼備の人物

バートンはイギリス軍の退役軍人の子としてイングランド南西部デヴォン州で生まれました。両親の都合でヨーロッパ各地を転々としたことから、安定した学校教育が受けられなかったようです。その後、退学処分になるものの、オックスフォード大学で学ぶなど学識や知的水準は高く、特に、言語についてはヨーロッパ言語をはじめ、アラビア語など生涯を通じて30以上の言語が理解できたといわれます。さらに、ヨーロッパの伝統的な武術も身につけており、文武兼備の人物だったのです。

■中近東と東アフリカにおける諜報員

1842年、彼はイギリス東インド会社の軍隊に入り、インドに渡ります。ここで、ヒンズー語や軍事的な特殊技術を身につけ、イギリス軍情報部の諜報員として主に中東地域で活動することになります。

1852年になるとイギリス王立地理学協会の支援を得てアラビア半島の地理的調査に赴き、イスラム教の聖地メッカへの潜入に成功しました。この任務の終了後に、ドイツ人医師からナイル川源流に大きな湖があることを聞かされたのです。

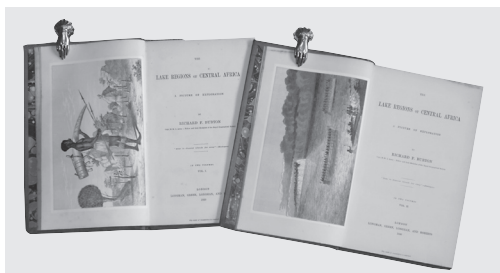
その後、バートンは王立地理学協会へナイル川源流調査の必要性を提案しましたが認められず、軍からはソマリア北海岸の調査が命じられます。この時、エチオピアのハラールにヨーロッパ人として初めて潜入しました。任務の合間に知己の仲のジョン・ヘニング・スピークと再会しますが、ソマリア人との戦闘で二人とも負傷してイギリスに戻りました。その後、バートン

はクリミア戦争下のトルコへの短期派遣から戻ると、ナイル川源流の調査が認められたため、彼はスピークに同行を求めたのです。

■アフリカの中央部を探検して

彼らの探検隊は1857年にタンザニア沖からアフリカ大陸に足を踏み入れました。灼熱のジャングルの中でバートンもスピークも視覚障害を起こしながら、翌1858年にはタンガニーカ湖を発見しています。バートンはこれをナイル川の源流と確信しましたが、スピークはさらに北上してヴィクトリア湖を発見し、これこそ源流であると主張しました。二人はこれをきっかけに反目することとなります。

先にイギリスに戻ったスピークは成果を発表しますが、その後、彼は銃の暴発によって死亡しました。しかし、世が移り研究が進むと、スピーク説の正しさが証明されることとなります。<sup>(1)</sup>



(本学図書館所蔵)

バートンはこの探検の様子を1860年に *The lake regions of Central Africa* (『中央アフリカ湖水地域探検』・写真) という2巻本に纏めました。本書では、タンガニーカ湖やヴィクトリア湖が大陸中東部の赤道付近から南に広がる、所謂「湖水地域」にあることを知らしめ、この大陸への意識を高める大きな役割を果たしました。

彼は同書の刊行で探検家として有名になりましたが、その知識と語学力は留まることがなく、さらに大きな展開をみせていきます。

■アラビアンナイトを世界へ

バートンは1861年からアフリカのスペイン領やブラジルのサントス、シリアのダマスカス、その後は終焉の地となるイタリアのトリエステでイギリス領事を務めることとなります。彼は1884年<sup>(2)</sup>に、そのトリエステで「アラビアンナイト」の英語訳に着手しました。

この文学は残存する稿本を根拠にして、9世